東アジアの職業観

—— 日本・中国・台湾・韓国の比較 ——

三 好 美 浩*, 吉 野 諒 三**

A Comparative Study of Work Value of the East Asian People

—— Japan, China, Taiwan, and South Korea ——

Yoshihiro MIYOSHI and Ryozo YOSHINO

This study focuses on the similarities and differences of the work values among the peoples studies in our East Asia Value Survey conducted during 2002-2004. It shows useful aspects of cross-national comparison on the East Asia.

Some researchers consider that the East Asia is under the influence of Confucianism, as the western countries under the influence of Christianity. It is said that scholars and civil servants are more respected than practical workers in Confucian ethics. Therefore, Maoism in China emphasized practical workers (farmers and labors) more respected. On the other hand, Confucian ethics of Japan was accepted among samurai (warrior)'s ethics at Edo era, may have been lost in the stream of democratization after Meiji era and in the reorganization after World War II.

The questionnaire of our East Asia Value Survey included two open questions about the occupation: "What occupation do you respect most?"; "What is the occupation you yourself would like to have?" The results of these responses indicate that the three categories as "Teacher", "Medical Doctor" and "None or Don't Know" are useful criteria for the comparison among East Asian Peoples.

Key words: cross-national comparative survey, East Asia, Work Value, occupation-related open questions

キーワード: 職業観, 労働観, 国際比較

1. はじめに

我々が2002年から遂行中の「東アジア価値観国際比較調査」(これ以後「東アジア価値観調査」と呼ぶ)の調査票には、「あなたが一番尊敬する職業は何ですか(自由回答項目)」という質問がある。日本の調査デー

タは、この質問に対して有効回答票787人中15人が「職業に貴賤はない」という意味の回答をしている。一方、米国では、誰もが努力によってより高いステータスの職業に就くことができるという前提(建前?)があり、職業階層意識を形成している。社会集団のなかで共有される価値観が、このような職業意識の断片にも現われる。

これまでの職業観に関する日本の調査としては、1955年から10年ごとに全国規模のSSM(社会階層と社会移動)調査が実施されてきた。日本社会学会調査委員会(1956)により1955年に実施されたSSM調査では、全国の20歳から69歳までの男子有権者を対象としており、層別無作為抽出された4,500の標本に対して、面接調査で回答を得ている。この調査の中で、32

*兵庫教育大学教育・社会調査研究センター
(Educational and Social Survey Research Center,
Hyogo University of Teacher Education)
連絡先: 〒108-0023 東京都港区芝浦3-3-6 キャンパス・イノベーションセンター304号
**大学利用共同法人情報・システム研究機構 統計数理研究所
(The Institute of Statistical Mathematics)
連絡先: 〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

種の職業名を5段階(「最も高い」「やや高い」「ふつう」「やや低い」「最も低い」)の階層に分類してもらい、5段階のそれぞれに高い方から低い方へ100点、75点、50点、25点、0点の得点を与えて、それらの平均点に基づいた職業ランキングを示している。例えば、この結果をまとめている Nisihira (1958) は、SSM 調査のデータについて、ILO (International Labor Office) の標準職業分類に準じて、国際比較の枠組みのなかで各職業分類の層の大きさや、父と子との間の職業移動を分析している。更に、西平 (1964) では、1964年に東京都23区の有権者から、無作為抽出した標本(回答者)に対して、98種の職業名を1955年のSSM調査と同様に5段階で分類してもらった結果についても1955年の結果と比較しながら論じている。その後も継続されているSSM調査の結果は、直井・鈴木 (1977) では1975年調査について、直井・盛山編 (1990) では1985年調査について述べられている。東アジアのSSM調査の適用結果と解釈との妥当性については、園田編 (2005) で考察されている。他にも父と子との間の職業の世襲、性別による各職業分類の層の大きさ、職業移動の流動性、職業威信に関する研究が、特に社会学のなかで積極的に取り組まれてきた(Breiger, 1981; Duncan, 1979; Ganzeboom & Treiman, 1996; Ganzeboom, Treiman, & Ultee, 1991; Hauser & Mossel, 1985; Hout, 1984, 1988; Jencks, Perman, & Rainwater, 1988; Nakao & Treas, 1994; Perrin, 1904; Yamaguchi, 1983)。米国のように職業選択の自由が保障されているという前提があるからこそ、職業威信の研究として職業階層を認める観点を明示できる。職業選択の自由がない国や職業間の流動性が低い国では、職業階層は単に身分や地位の差別化につながるものではない。そのため、米国流の職業威信研究のような職業観の調査を、東アジア諸国において同様に適用するのは適当とは思えない。

我々の「東アジア価値観調査」において、東アジアの人々の職業観を解明するという課題があった。そのため、職業観の国際比較の可能性を考慮するために、職業に関わる各国の状況の違いを理解し、制約を極力緩くした自由回答形式の質問を設けることになった。

統計数理研究所の国際比較調査グループによって実施されてきた「意識の国際比較」調査の延長上に位置づけられる「東アジア価値観調査」では、日本(2002年)、中国(2002年)(北京、上海、香港)、台湾(2003年)、韓国(2003年)、シンガポール(2004年)におい

て調査が実施された(吉野, 2001, 2004)。調査票の質問項目は、「国民性七か国比較調査」(林他, 1997)で用いたものを土台としながら、東アジアの国々の国際比較可能性を検討し、質問の選定、追加、修正を行った。現在既に、日本の調査データに加え、中国(北京、上海、香港)、台湾、韓国、シンガポールの調査データの収集とデータクリーニングを終えている(吉野編, 2004a, 2004b, 2005a, 2005b, 2005c)。本論文では、最新のシンガポールの調査データを除いたものについて分析を行った結果をまとめた。また、「東アジア価値観調査」と並行して、同調査の北京と上海で利用したものと同一の調査票を用いて、2003年に杭州(中国)、昆明(中国)でも調査が実施された(鄭編, 2005)。そこで、これらの日本、中国5都市、台湾、韓国の調査データに基づいて、職業観や勤労観に焦点を当て、各国の人々の価値観の相異を論じる。

2. 勤労観とその背景

欧米におけるキリスト教の職業倫理と資本主義との関連を述べた Weber(1920)は、資本主義の定着に、プロテスタントのカルヴァン派の倫理が大きく寄与したことを論じた。暴利や利子禁止といった倫理的規定を課していたカトリックや、プロテスタントのルター派の倫理よりも、プロテスタンティズムのカルヴァン派や洗礼派の倫理の筋道に、資本主義が定着してきた理由を見てとった。カルヴァン派は、より多くの仕事を行うことは社会からの要求に貢献や献身することであり、その結果として経済的に豊かになったとしても、それは積極的に社会貢献や献身を行ったことを意味するとした。そして、このような勤労観を、カルヴァン派は「隣人愛の実践」と位置づけたと Weber は指摘した。この勤労観が、資本主義の定着へと発展してきたという。

欧米がキリスト教の倫理に大きな影響を受けているように、東アジア地域が儒教倫理から大きな影響を受けていると考える研究者も多い。儒教倫理では、農業や肉体労働といった実業的な職業よりも、文官や学者といった頭脳を使う職業の方が尊敬される傾向にあった。近代中国における毛沢東主義では、実業の尊重、男女平等観の徹底などが強調され、それまでの伝統的な価値観を変革することが試みられた。これらは、中国人を取り巻く仕事環境にも大きな影響を与えた。日本では、江戸時代に武士階層を中心に儒教精神が受入れ

られていったが、その後、Reischauer (1981) が指摘するような自由民権運動や普通選挙の確立といった明治期以降の日本における近代化の流れや、第二次大戦後の改革によって儒教精神が少なからず失われてきたと考えられている。

現在の日本人に共有される職業観や勤労観の水脈を歴史的に辿っていくと、少なくとも江戸時代初期まではたどり着くように思える。戦国時代の混乱から、江戸時代になり天下泰平の世の中へと進むなかで、日常の実生活を重んずる思想が説かれるようになった。江戸時代初頭の学問として朱子学の活躍が目覚しいが、その後に実生活の思想として、鈴木正三の禅と実生活を関連づける試み(鈴木編, 1962)、石田梅岩に始まる石門心学(柴田校注, 1971)、貝原益軒の訓え(貝原, 1938)などが生まれた。これらの思想には、神道、仏教、儒教の内容が、各々の枠組を越えた実生活の倫理として総合されていた。江戸時代に生まれた実生活の思想は、現代日本の実生活の規範にもその跡が見られる。本節の以下では、これらの実生活の思想で述べられた職業倫理を概説してみる。

鈴木正三『万民徳用』では、武士、農民、職人、商人についてそれぞれの修業のあり方が述べられている。「農人日用」では「農業則仏行なり、意得悪時は賤業也」、「職人日用」では「一切の所作、皆以世界のためとなることを以しるべし」、そして「商人日用」では「売買をせん人は、先得利の益べき心づかひを修行すべし」と述べ、職分が異なるとしても心を修めることには変わりはなく、一意専心に事業に取り組むことが諭されている(鈴木編, 1962)。

石田梅岩『齐家論』に「上より下に至り、職分は異なれども理は一なり」とある。この「一なる理」とは、職分に関わらず身を修めることであり、身を修めるために心を深く知ることを説いている。『石田先生語録』には、「職分ノ外ニ望ミ有ラバ有心ニシテ無心ノ天ニ違ヘリ。違ヘバ天命ニ背ク。」とある。士農工商の身分制度のなかで、職業選択の自由がほとんどなかった時代に、職分を天命として受入れることが諭された。身分の上下はありながら、職分を転じる不自由を天命として受入れ、身を修めることを勧めているのである。深く心を知り、身を修めたときの理想的な心のあり方として、「仁心」「正直」「儉約」「実情」「本心」「明德」「本来ノ面目」という概念が示されている(柴田校注, 1971)。これらの実生活の思想は、職分が何であれ、各々の職分のなかで深く深く心の奥を知ることによって、

動かない心を獲得することが重要だという点では共通している。このような梅岩の学問を継承した手島堵庵が、やさしい言葉で『前訓』などを記し、講舎を組織化し、そして石門心学の伝播につとめたことによって、実生活の思想が庶民の生活に広がっていった。

3. 職業に関する自由回答の概要

今回、「東アジア価値観調査」の調査票を作成するにあたり、以下のような職業に関する二つの質問が加えられた。これらの二つの質問は、互いに自由回答項目となっている。

問 39a あなたが一番尊敬する職業は何ですか。

問 39b では、ご自身が実際につきたいと思う職業は何ですか。

1978年にNHK放送世論調査所が実施した「日本人の職業観」調査(NHK放送世論調査所編, 1979)では、回答者に選択肢カード(回答票)を見せながら「問5[回答票]のように分けた場合、どれが理想的な職業だと思いますか。あなたのお考えにいちばん近いものをお答えください。」を尋ねる質問がある。選択肢は14種の具体的な職業分類カテゴリーからなり、それ以外の回答は「この中にはない、わからない、無回答」のカテゴリーにまとめられている。この質問を参考に、新しい自由回答形式の質問として、上記の問 39a、問 39bを作成し、「東アジア価値観調査」調査票に加えたのであった。

問 39a、bを個別に分析のためのコーディングの基準についての概要を、簡単にまとめる。

「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両質問とも、複数の職業をあげた場合は、最初にあげた職業を採択することにした。つまり、一人の回答者のあげた職業は、複数のあげた場合でも一つの職業となる。そのため、各国・地域の回答頻度の総数は、回答者総数と同一になる。該当率は、各職業の回答頻度を、具体的な職業名をあげた各国・地域の回答者の総数で割った値となっている。

つぎに、問 39aと問 39bを個別に分析する場合のコーディング基準は、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の回答を分類するに当たり、「教師」は基本的に初等教育と中等教育の先生を指す場合とし、汎用な意味を持つ「先生」や「教師」、かつ「学校の先生」「教員」という回答は「教師」に含むことにした。この基準によると、日本においては小中高の先生が該当す

る。そのため、具体的な「大学教授」「幼稚園の先生」「保母」の回答は、明らかに高等教育、あるいは就学前教育に含まれるので「教師」のカテゴリーから除いた。より汎用な意味をもつ「教育者」の回答は、現場で活躍する初等教育や中等教育の先生という以外に教育行政に携わる人も含むので、「教師」のカテゴリーから除いた。各国において教育制度の違いはあるが、初等教育と中等教育を受ける年齢や期間に、それほど違いはない。また、「科学者」には、「科学研究者」も含み、「科学技術者」という場合は「科学者」のカテゴリーからは除いた。「科学技術者」という場合、「技術者」の意味合いが強くなり、自然法則や原理の解明に取り組むというよりも、自然法則や原理を生かしたモノづくりが重視されるので、「科学者」のカテゴリーと区別することにした。「なし」「わからない」「無回答」は、「なし・わからない」のカテゴリーにまとめた。「なし・わからない」以外の回答については、回答の具体的表現の程度に相異はあるが、総称として「具体的回答」と呼ぶことにする。

また、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」とのクロス表を分析する場合は、改めてコーディング基準を編成しているが、これについては後述する。

4. 分析と考察

4.1. 問39a「あなたが一番尊敬する職業は何ですか。」の回答傾向

「尊敬する職業」(表1)の上位10位までを見ると、日本、中国5都市、台湾、韓国の調査データすべてにおいて上位2位が「医者」と「教師」によって占められている。ただし、日本と香港は、「医者」が第1位、「教師」が第2位の順位で「教師」よりも「医者」の方が尊敬される職業であることが示されており、北京、上海、昆明、杭州、台湾、韓国では、「教師」が第1位、「医者」が第2位の順位である。各国・地域の「教師」の順位だけではなく該当率についても見ると、日本3.9%、香港9.9%、台湾9.0%に比べて、中国4都市の「教師」が極めて高い該当率を示しており、北京33.0%、上海27.4%、昆明28.7%、杭州19.3%である。香港については、「医者」と「教師」の順位が逆転しており、中国の他の都市と回答傾向が異なっている。香港のその他の特徴は、「軍人」の回答が中国の他の都市に比べて著しく少ないこと、上位10位の中に「消防員」と「宗教人」が上げられていることである。特に「消防員」は

8.0%を示している。また香港は、中国の他の都市よりも「公務員」をあげる率が低い様子が伺える。ただし、全体的に各国・地域の調査データの該当率を見ると、第3位、第4位の職業において、すでに5%以下の回答しか得られていないことから、そのような低い該当率の職業ランキングを比較する意味は小さい。しかしながら、北京、上海、昆明、杭州では、低い該当率ながら「科学者」が第3位に入っていることは、注目に値する。さらに「科学者」は、香港で第5位、台湾で9位に入っている。このことは、「東アジア価値観調査」に含まれる科学観に関する他の質問(吉野編, 2004a)に見られる中国人の科学への高い信頼感と、「尊敬する職業」として「科学者」という回答を上げる結果とが緊密に結びついているようである。そこで、本調査の科学観に関する質問のなかから、各国の違いが鮮明に現れた科学技術への信頼感を尋ねた問41jの質問文と回答分布(表2)を見てみたい。

問41 [カード24]あなたは、次にあげる組織や制度、事からをどの程度信頼しますか。「非常に信頼する」「やや信頼する」「あまり信頼しない」「全く信頼しない」のいずれかでお答え下さい。

非常に やや あまり 全く わから
信頼 信頼 信頼 信頼 ない
する する ない しない

j. 科学技術 …………… 1 2 3 4 9

問41jで「非常に信頼する」の選択率は、北京78.4%、昆明77.0%、上海76.8%、杭州54.4%と、中国4都市において過半数を示している。香港を除く中国4都市の結果から、中国で科学への高い信頼感が形成されていることが伺える。これに続いて、香港26.2%、台湾15.8%、日本11.8%、韓国8.3%の順番に選択率が低くなっている。「非常に信頼する」と「やや信頼する」の選択率を合計すると、北京、上海、昆明では95%以上となり、最も選択率の低い日本でも70%を超える結果を示している。この結果は、東アジアの科学観を比較する際に、科学や科学技術を単純な二元論の視点から「信頼する」と「信頼しない」に分けることが適切とは言えないことを示唆しており、むしろ「信頼する」の程度をより細かく段階的に見ていくことが肝要である。

問39a「尊敬する職業」に戻って「なし・わからない」の該当率を見ると、日本は54.0%にのぼる。それに対して、北京、上海は、「なし・わからない」と回答した人が少なく、それぞれ7.3%、10.2%である。日本、北

表 1. 問 39a 「尊敬する職業」の回答ランキング

日本			
sample	787	度数	%
1	医者	78	9.9
2	教師	31	3.9
3	農業	22	2.8
4	看護師	13	1.7
5	公務員	10	1.3
6	介護職	9	1.1
7	福祉関係	8	1.0
7	スポーツ選手	8	1.0
9	医療関係	7	0.9
10	教育者	6	0.8
10	弁護士	6	0.8
10	技術職	6	0.8
欄外	科学者	3	0.4
	警察	3	0.4
	なし・わからない	425	54.0

上海			
sample	1,053	度数	%
1	教師（教師）	288	27.4
2	医生（医者）	166	15.8
3	科学家（科学者）	52	4.9
4	律师（弁護士）	45	4.3
5	军人（軍人）	36	3.4
6	警察	31	2.9
7	公务员（公務員）	27	2.6
8	工人（労働者）	21	2.0
9	法官（裁判官）	18	1.7
10	白领（ホワイト・カラー）	11	1.0
10	工程师（技師）	11	1.0
10	企业家（企業家）	11	1.0
欄外	护士（看護師）	4	0.4
	农民（農民）	3	0.3
	なし・わからない	107	10.2

北京			
sample	1,062	度数	%
1	教师（教師）	350	33.0
2	医生（医者）	147	13.8
3	科学家（科学者）	53	5.0
4	军人（軍人）	43	4.0
5	律师（弁護士）	34	3.2
6	警察	19	1.8
7	工人（労働者）	16	1.5
8	公务员（公務員）	15	1.4
9	法官（裁判官）	14	1.3
10	清洁工（清掃労働者）	11	1.0
欄外	护士（看護師）	3	0.3
	农民（農民）	2	0.2
	なし・わからない	78	7.3

香港			
sample	1,057	度数	%
1	醫生（医者）	286	27.1
2	教師	105	9.9
3	消防員	85	8.0
4	警察	34	3.2
5	科學家（科学者）	22	2.1
6	護士（看護師）	17	1.6
6	律師（弁護士）	17	1.6
8	法官（裁判官）	16	1.5
9	宗教人	12	1.1
10	清潔員	10	0.9
欄外	軍人	3	0.3
	農夫	1	0.1
	なし・わからない	242	22.9

表 1. 問 39a「尊敬する職業」の回答ランキング (つづき)

昆明			
sample	1,018	度数	%
1	教師 (教師)	292	28.7
2	医生 (医者)	128	12.6
3	科学家 (科学者)	44	4.3
4	军人 (軍人)	33	3.2
5	警察	21	2.1
6	公务员 (公務員)	16	1.6
7	律师 (弁護士)	19	1.9
8	工人 (労働者)	11	1.1
8	企业家 (企業家)	8	0.8
10	环卫工人	7	0.7
欄外	农民 (農民)	5	0.5
	护士 (看護師)	2	0.2
	なし・わからない	227	22.3

杭州			
sample	911	度数	%
1	教师 (教師)	176	19.3
2	医生 (医者)	82	9.0
3	科学家 (科学者)	34	3.7
4	军人 (軍人)	23	2.5
5	公务员 (公務員)	17	1.9
6	警察	16	1.8
7	律师 (弁護士)	10	1.1
8	工程师 (技師)	9	1.0
8	科技工作者	9	1.0
10	法官 (裁判官)	7	0.8
欄外	护士 (看護師)	3	0.3
	农民 (農民)	1	0.1
	なし・わからない	358	39.3

台湾			
sample	732	度数	%
1	教師 (教師)	66	9.0
2	醫生 (医者)	52	7.1
3	義工	19	2.6
4	警察	14	1.9
5	護士 (看護師)	13	1.8
6	公務員	12	1.6
7	消防員	11	1.5
7	農夫	11	1.5
9	科學家 (科学者)	10	1.4
9	正當工作	10	1.4
欄外	軍人	6	0.8
	法官 (裁判官)	4	0.5
	律師 (弁護士)	3	0.4
	なし・わからない	256	35.0

韓国			
sample	1,006	度数	%
1	Teacher (教師)	136	13.5
2	Medical Doctor (医者)	100	9.9
3	Civil Servant (公務員)	71	7.1
4	An independent enterprise	38	3.8
5	Religionist (宗教人)	33	3.3
6	Professor (教授)	30	3.0
7	One who serves the public at large	28	2.8
8	Agriculture	22	2.2
9	Social welfare work	21	2.1
10	Judge	13	1.3
欄外	Lawyer	11	1.1
	Soldier	8	0.8
	Nurse	2	0.2
	なし・わからない	291	28.9

表 2. 問 41j「信頼感—科学技術」の回答傾向（％）

問 41j		2002	2002	2002	2002	2003	2003	2003	2003
Item	category	日本	北京	上海	香港	昆明	杭州	台湾	韓国
信頼感— 科学技術	1) 非常に信頼する	11.8	78.4	76.8	26.2	77.0	54.4	15.8	8.3
	2) やや信頼する	61.6	18.7	20.3	58.0	18.2	35.8	60.5	69.5
	3) あまり信頼しない	11.9	1.6	2.1	10.0	2.2	6.0	15.6	16.6
	4) 全く信頼しない	0.4	0.3	0.1	1.6	0.8	0.5	1.8	1.5
	9) わからない	14.2	0.9	0.7	4.2	1.9	3.2	6.3	4.1

京、上海ほど極端ではないが、その他の国・地域では回答者全体の 20％から 40％の範囲で「なし・わからない」と回答している。これらの結果から、「なし・わからない」の該当率は、各国・地域によって大きく異なっていることが分かる。林 (1996, 2001) は、日本では中間回答の選択率が高い傾向や極端な表現を好まない回答傾向を示しているが、「尊敬する職業」の質問において「なし・わからない」の回答が多いことは、先行研究で指摘された日本の曖昧な回答傾向と密接な関係がある可能性も考えられる。また、各国の「医者」、「教師」、「なし・わからない」の 3 カテゴリーを合計した該当率は、日本 67.8％、北京 54.1％、上海 53.3％、香港 59.9％、昆明 63.6％、杭州 67.6％、台湾 51.1％、韓国 52.4％となり、軒並み 50％以上の回答が含まれ、日本や杭州では 70％に届くほどの回答が含まれている。つまり、これらの 3 カテゴリーで、具体的に職業をあげた回答者全体の半分から 3 分の 2 の「尊敬する職業」は説明できることを示している。

「医者」と「教師」への該当率（％）をそれぞれ縦軸と横軸にとり布置する（図 1）と、まず北京、上海、昆明の相互の距離が近く、よく類似していることがわかる。香港は、他の国や地域と大きく異なり、固有の傾向がみられる。さらに、日本、台湾、韓国、杭州が比較的類似した回答パターンを示している。香港を除く中国 4 都市では、「教師」が多くの人々に尊敬される職業であることが理解できる。香港は、「教師」よりも「医者」がより高い該当率であることから、「医者」の方がより多くの尊敬を集めている職業である。日本、台湾、韓国との比較から、「教師」や「医者」を尊敬するという意識が、中国ではより多くの人々に共有されていることも分かる。

図 1. 問 39a「尊敬する職業」の「教師」と「医者」の百分率による布置図

4.2. 問 39b「では、ご自身が実際につきたいと思う職業は何ですか。」の回答傾向

「つきたいと思う職業」についても問 39a と同様に上位 10 位までを表 3 に示す。前問では、各国・地域の上位 2 位までを「医者」と「教師」が占めたが、問 39b では、北京、上海、香港、昆明、杭州の中国 5 都市で「教師」が第 1 位、「医者」が第 2 位となり、問 39a と同様に「教師」と「医者」が上位 2 位までを占めている。日本、台湾、韓国では、「教師」は上位 2 位以内に入っているが、「医者」は順位を下げている。その代わりに、日本では「公務員」が第 1 位、台湾では「公務員」が第 2 位、韓国では「独立企業」が第 2 位に入っている。「尊敬する職業」で常に上位 2 位までに入っていた「医者」の順位は、日本と台湾では第 3 位、韓国では第 5 位となっている。

表 3. 問 39b「つきたいと思う職業」の回答ランキング

日本			
sample	787	度数	%
1	公務員	30	3.8
2	教師	25	3.2
3	医者	23	2.9
4	看護師	18	2.3
5	農業	13	1.7
6	保育士	12	1.5
6	技術者	12	1.5
8	介護職	8	1.0
8	サービス業	8	1.0
10	弁護士	7	0.9
10	事務職	7	0.9
10	サラリーマン	7	0.9
欄外			
	なし・わからない	383	48.7

北京			
sample	1,062	度数	%
1	教師 (教師)	156	14.7
2	医生 (医者)	101	9.5
3	军人 (軍人)	38	3.6
4	律师 (弁護士)	36	3.4
5	科学家 (科学者)	31	2.9
6	公务员 (公務員)	29	2.7
7	警察	27	2.5
8	自由职业者	22	2.1
9	管理人员	17	1.6
10	司机 (運転手)	15	1.4
10	工人 (労働者)	15	1.4
欄外			
	なし・わからない	80	7.5

上海			
sample	1,053	度数	%
1	教师 (教師)	151	14.3
2	医生 (医者)	135	12.8
3	公务员 (公務員)	55	5.2
4	律师 (弁護士)	40	3.8
5	老板 (商店の主人)	31	2.9
6	科学家 (科学者)	30	2.8
7	工人 (労働者)	25	2.4
8	军人 (軍人)	23	2.2
9	自由职业者	21	2.0
10	工程师 (技師)	19	1.8
欄外	警察	17	1.6
	なし・わからない	112	10.6

香港			
sample	1,057	度数	%
1	教師 (教師)	74	7.0
2	醫生 (医者)	67	6.3
3	警察	33	3.1
4	護士 (看護師)	26	2.5
5	社會工作者	24	2.3
6	律師 (弁護士)	21	2.0
7	商人	18	1.7
8	消防員	16	1.5
8	設計師	16	1.5
10	文職人員	15	1.4
欄外			
	なし・わからない	307	29.0

表 3. 問 39b 「つきたいと思う職業」の回答ランキング（つづき）

昆明			
sample	1,018	度数	%
1	教師（教師）	129	12.7
2	医生（医者）	109	10.7
3	公务员（公務員）	32	3.1
4	军人（軍人）	31	3.0
5	自由职业者	29	2.8
6	警察	26	2.6
7	律师（弁護士）	21	2.1
8	科学家（科学者）	20	2.0
9	老板（商店の主人）	12	1.2
9	工人（労働者）	12	1.2
欄外			
	なし・わからない	215	21.1

杭州			
sample	911	度数	%
1	教师（教師）	86	9.4
2	医生（医者）	47	5.2
3	公务员（公務員）	31	3.4
4	自由职业者	23	2.5
5	老板（商店の主人）	16	1.8
6	律师（弁護士）	14	1.5
7	军人（軍人）	13	1.4
8	科学家（科学者）	12	1.3
8	警察	12	1.3
10	白领（ホワイト・カラー）	10	1.1
欄外			
	なし・わからない	356	39.1

台湾			
sample	732	度数	%
1	教師	58	7.9
2	公務員	25	3.4
3	醫生（医者）	22	3.0
4	家庭主婦	13	1.8
5	義工	12	1.6
5	美髪師	12	1.6
7	服務業	10	1.4
8	幼教	9	1.2
8	護士（看護師）	9	1.2
10	藝術家	8	1.1
10	農夫	8	1.1
欄外	軍人	7	1.0
	なし・わからない	213	29.1

韓国			
sample	1,006	度数	%
1	Teacher（教師）	135	13.4
2	An independent enterprise	82	8.2
3	Civil servant（公務員）	53	5.3
4	Agriculture	39	3.9
5	Medical doctor（医者）	35	3.5
6	Professor	21	2.1
7	Leader	18	1.8
8	Office work	17	1.7
9	Social welfare work	16	1.6
10	Prosecutor	14	1.4
10	Policeman	14	1.4
欄外			
	なし・わからない	194	19.3

また「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」は、該当率の高い順番に日本 48.7%、杭州 39.1%、台湾 29.1%、香港 29.0%、昆明 21.1%、韓国 19.3%、上海 10.6%、北京 7.5% であった。ここでも日本の具体的回答が少なく、それとは反対に、北京、上海では具体的回答が多いことが確認できる。

4.3. 問 39a「尊敬する職業」と問 39b「つきたいと思う職業」の回答パターンのマクロ比較

4.3.1. コーディング後の職業と頻度の傾向分析

「教師」は、日本、中国 5 都市、台湾、韓国のすべてにおいて、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両方の質問で、上位 2 位までに入った。「医者」は、「尊敬する職業」では、すべての国・地域で上位 2 位までに入ったが、「つきたいと思う職業」では、日本、台湾、韓国で順位を下げた。この結果は、尊敬される職業であることと、実際に自分が就くことができる職業（就業の難易度）であるかということが、各国・地域の事情により異なっている状況が現れたと考えることができる。更には、尊敬する職業と就きたい職業とは、必ずしも一致しない可能性もある。「尊敬する職業」の質問では、「自分の仕事」、「現在の仕事」という回答が得られたように、回答者の自尊心が反映されている場合もあるが、基本的に「尊敬する職業」の質問では回答者自身の願望を直接尋ねているわけではない。

各国・地域の「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の質問へのそれぞれの回答について、質問間の対応を考慮して分析してみよう。

日本の回答を見ると、「尊敬する職業」の医者 9.9%を除き、他の職業は 4% 以下である。そのことを考慮したうえで、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両方の質問で上位 5 位までに入った職業は、「医者」、「教師」、「農業」、「看護師」、「公務員」と共通している。順位は、第 2 位の「教師」、第 4 位の「看護師」は変わらず、「尊敬する職業」で第 1 位の「医者」、第 3 位の「農業」、第 5 位の「公務員」が、「つきたいと思う職業」では、第 1 位が「公務員」、第 3 位が「医者」、第 5 位が「農業」となった。「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化を見ると、「医者」、「教師」、「農業」は減少しており、その反対に、「看護師」、「公務員」は増加している。

北京の「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への順位の変化では、「教師」は第 1 位で変化なし、「医者」も第 2 位で変化なし、「科学者」は第 3 位から第 5

位へ、「軍人」は第 4 位から第 3 位へ、「弁護士」は第 5 位から第 4 位に変化している。「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化を見ると、「弁護士」の該当率は増加し、その他の「教師」、「医者」、「科学者」、「軍人」の該当率は減少している。北京の上位 5 位までの職業は、順位は異なるが両方の質問とも同様の職業が上がっている。このことは、北京において「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の上位にあがる職業の関連性は、比較的安定した傾向があることを示しているといえよう。

上海における「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の具体的回答の順位では、「教師」が第 1 位、「医者」が第 2 位、「弁護士」が第 4 位と変化がない。変化がみられる上位の職業は、「科学者」が第 3 位から第 6 位へ順位を下げ、その反対に、「公務員」が第 7 位から第 3 位へと順位をあげているのが特徴的な傾向である。特に、日本において「つきたいと思う職業」に「公務員」と回答した人が多かったが、上海でも同様に「つきたいと思う職業」の「公務員」の該当率が増加していることがわかる。順位の変化がなかった「教師」、「医者」、「弁護士」、順位の変化のあった「科学者」は、「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化において、すべて減少している。

香港の「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の具体的回答の順位は、「医者」が第 1 位から第 2 位へ、「教師」が第 2 位から第 1 位へと順位が入れ替わっている。さらに香港の特徴は、「消防員」が第 3 位から第 8 位へと順位を下げ、「警察」が第 4 位から第 3 位へと順位をあげている。さらに取り上げた「医者」、「教師」、「消防員」の該当率の変化は、軒並み減少している。「警察」の該当率は、ほとんど変化がみられない。「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の順位は、「医者」「教師」「警察」が上位で比較的安定した傾向を示している。

昆明の「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への具体的回答の順位の変化では、第 1 位は「教師」、第 2 位は「医者」で変化なし、「科学者」が第 3 位から第 8 位へ、「公務員」が第 6 位から第 3 位へと変化している。「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化は、「教師」、「医者」、「科学者」では減少しており、それとは逆に、「公務員」の該当率は増加している。

杭州の「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への具体的回答における順位の変化では、第 1 位の「教

師」,第2位の「医者」には変化がなく,上位2位までは安定した結果を得られた。「科学者」が第3位から第8位へと順位を下げ,その反対に,「公務員」が第5位から第3位へと順位を上げている。これらの順位の変化は,昆明の変化によく似ている。「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化は,「教師」,「医者」,「科学者」の該当率は減少しており,「公務員」の該当率は増加している。

台湾の「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への具体的回答の順位の変化は,「教師」は第1位で変化がなく,「医者」が第2位から第3位に順位を下げ,「公務員」が第6位から第2位へと順位を上げている。該当率の変化では,「教師」,「医者」は減少しており,「公務員」の該当率が増加している。さらにここでも,「つきたいと思う職業」での公務員志向の高さが現れている。

韓国では,「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への順位の変化は,「教師」は両方の質問で第1位,「医者」は第2位から第5位へと順位を下げ,「公務員」は第3位で変化がない。「独立企業」が第4位から第2位へと順位を上げている。「尊敬する職業」から「つきたいと思う職業」への該当率の変化も見てみると,「教師」,「医者」,「公務員」で該当率が減少しており,その反対に「独立企業」の該当率は増加している。韓国の特徴として,「つきたいと思う職業」における独立企業志向の高さが伺える。

「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」について,国・地域別で具体的回答の職業を見てきたが,上位にランクされた職業は,両方の質問で共通する職業があがっているといえよう。「つきたいと思う職業」の結果と比べて「尊敬する職業」の結果は,最上位の該当率が高く,特定の職業に尊敬が集まる傾向がみられる。この傾向は,特に中国5都市において顕著に現れている。

次に,「なし・わからない」の回答傾向について見ていきたい。「尊敬する職業」では,韓国の「なし・わからない」は8つの国・地域中の4番目に高い該当率を示していたが,「つきたいと思う職業」では6番目に高い該当率に順位を下げた。それに伴い,「尊敬する職業」の該当率において5位の香港,6位の昆明が,「つきたいと思う職業」の該当率では韓国を抜いて一つ順位をあげ,4位に香港,5位に昆明が入った。他の国は,「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」で該当率に基づいた各国の順位に変化はなかった。その他の国は,高い該当率の順で,1位が日本,2位が杭州,3位が台湾,

7位が上海,8位が北京である。これらの結果から,韓国では,「つきたいと思う職業」よりも「尊敬する職業」の方が,具体的な回答をあげやすい様子が伺える。

国別で「尊敬する職業」の「なし・わからない」の該当率から「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」の該当率を引いた差を見てみると,日本-5.3%,北京+0.2%,上海+0.4%,香港+6.1%,昆明-1.2%,杭州-0.2%,台湾-5.9%,韓国-9.6%となる。これらの該当率の差から,北京,上海,昆明,杭州では,「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」の該当率の変化はほとんどない。日本,香港,台湾,韓国は,無視できない該当率の差があり,香港は「尊敬する職業」よりも「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」の該当率が高く,その反対に,日本,台湾,韓国は,「尊敬する職業」よりも「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」の該当率が低いという違いが現れている。二つの質問における該当率の順位と差の両方の視点から総合すると,該当率の差では,変化の増減が極端に小さい中国4都市と,増減が大きい日本,香港,台湾,韓国に分けられる。しかし,該当率の順位では,該当率の差の影響は韓国の順位の変化のみに反映されているようにしか見えず,順位の比較的頑健な安定性が示された。

二つの質問への回答傾向のまとめとして,「具体的回答」と「なし・わからない」を見てみると,日本は問39a, b共に約半数の回答者が「なし・わからない」と回答した。それに対して,「なし・わからない」の回答が少ないのは,北京,上海で,特に北京は「なし・わからない」の回答が,10%以下である。これらの結果の理由としては,日本の回答者の年齢分布が中国に比べて高齢であることが考えられるが,該当率の差の大きさを考えるとそれだけが理由とはいえない。

4.3.2. 「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」との各回答者の対応の一致・非一致

ここでは各回答者が「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両方の質問について同様の回答をしたかどうかを分析する(表4)。両方の質問に同様の回答をした場合を「一致」,異なる回答をした場合を「非一致」と呼ぶことにする。「一致」の回答は,全体の結果だけではなく,さらに「具体的回答」と「なし・わからない」に2分類した結果も示す。ただし,この「一致」における「なし・わからない」は,問39aと問39bの両方の回答が4.3.1と4.3.3の「なし・わからない」に

表4. 「一致」と「非一致」の該当頻度

	一致			非一致
	全体	具体的回答	なし・わからない	
日本	350 (44.5%)	70 (8.9%)	280 (35.6%)	437 (55.5%)
北京	359 (33.8%)	324 (30.5%)	35 (3.3%)	703 (66.2%)
上海	431 (40.9%)	380 (36.1%)	51 (4.8%)	622 (59.1%)
香港	279 (26.4%)	149 (14.1%)	130 (12.3%)	778 (73.6%)
昆明	402 (39.5%)	276 (27.1%)	126 (12.4%)	616 (60.5%)
杭州	414 (45.4%)	165 (18.1%)	249 (27.3%)	497 (54.6%)
台湾	251 (34.3%)	113 (15.4%)	138 (18.9%)	481 (65.7%)
韓国	364 (36.2%)	239 (23.8%)	125 (12.4%)	642 (63.8%)

該当する場合でも、内容が一致していないときは「非一致」として扱ったので、必ずしも4.3.1と4.3.3の頻度と同じではない。

「一致」の全体の該当率が、最も高いのは杭州45.4%であり、反対に最も低いのは香港26.4%である。「非一致」の該当率では、香港が最も高い73.6%を示しており、反対に「非一致」の該当率が最も低いのは杭州54.6%である。

ところで、「一致」と「非一致」との各国・地域の比較では、日本の「一致」の該当率が一見高くみえる。しかしながら、日本は「なし・わからない」の該当率が高く、「一致」の具体的回答は、各国・地域のなかで最低の該当率となっている。香港の該当率は、「一致」と「非一致」との比較においても、さらに「一致」の具体的回答をみても、低い傾向を示している。それに対して、「一致」の具体的回答において該当率が高いのは上海で、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」との間に強い関連性があることが分かる。「一致」の全体の該当率と、「一致」の具体的回答の該当率とを比較すると、具体的回答の該当率の方が、バラツキが見られる。「一致」の具体的回答における該当率は、日本が最も低く8.9%、上海が最も高く36.1%となり、程度の相違は

大きい。

4.3.3. クロス表による傾向分析

二つの質問について回答傾向の対応を分析するにあたり、問39a「尊敬する職業」と問39b「つきたいと思う職業」を個別に分析した結果を踏まえて、再コーディングを行った。再コーディングの内容は、前述した部分で区別した「教師」と「教育者」を、「教育者」の該当率が極めて低いことから「教師・教育者」のカテゴリーにまとめた。具体的回答に含まれ、かつ「医者」と「教師・教育者」に該当しない回答は「他（その他）」にまとめた。そこで、「医者」、「教師・教育者」、「他（その他）」、「DK/NA（なし・わからない）」の4カテゴリーへの分類から、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」によるクロス表（表5）を分析する。

日本のひとつの特徴は、他の国・地域に比べて「なし・わからない」の該当率が高いことであった。さらにクロス表からこの特徴を分析すると、「つきたいと思う職業」の「なし・わからない」の該当率が、「尊敬する職業」の54.0%よりも低い48.7%であり、「つきたいと思う職業」は「尊敬する職業」よりも具体的回答が多く得られた。順序効果の影響を検討することも含めて、今後、実験的調査による捕捉が必要ではあるが、現段階では日本の「つきたいと思う職業」の該当率が「尊敬する職業」の該当率よりも高い結果を示したことを確認した。また、日本では「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両方の質問に対して「なし・わからない」の回答をした人は36.7%、両方の質問へ具体的回答をした人は34.1%となり、「なし・わからない」の方が具体的回答を上回った。日本では、「尊敬する職業」で具体的回答をした人は、「つきたいと思う職業」でも具体的回答をする傾向が高く、「尊敬する職業」で「なし・わからない」の回答をした人は、「つきたいと思う職業」でも「なし・わからない」を回答する傾向が見られた。「尊敬する職業」で「なし・わからない」、 「つきたいと思う職業」で具体的回答をした人は日本の回答者全体の17.3%にあたり、「尊敬する職業」で具体的回答、「つきたいと思う職業」で「なし・わからない」を回答した人は日本の回答者全体の11.9%となり、「尊敬する職業」で「なし・わからない」、 「つきたいと思う職業」で具体的回答の組み合わせの方が若干高い該当率を示した。4カテゴリーの対応では、「つきたいと思う職業」に「医者」と回答した人は、「尊敬する職業」でも「医者」と回答している傾向が見られるが、そ

表 5. 問 39a「尊敬する職業」と問 39b「つきたいと思う職業」とのクロス表

日本		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	9 (1.1%)	11 (1.4%)	38 (4.8%)	20 (2.5%)	78 (9.9%)
	教師 教育者	2 (0.3%)	9 (1.1%)	14 (1.8%)	14 (1.8%)	39 (5.0%)
	その他	5 (0.6%)	18 (2.3%)	162 (20.6%)	60 (7.6%)	245 (31.1%)
	DK/NA	7 (0.9%)	8 (1.0%)	121 (15.4%)	289 (36.7%)	425 (54.0%)
	合計	23 (2.9%)	46 (5.8%)	335 (42.6%)	383 (48.7%)	787 (100.0%)

北京		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	55 (5.2%)	13 (1.2%)	71 (6.7%)	8 (0.8%)	147 (13.8%)
	教師 教育者	26 (2.4%)	123 (11.6%)	191 (18.0%)	15 (1.4%)	355 (33.4%)
	その他	18 (1.7%)	30 (2.8%)	413 (38.9%)	21 (2.0%)	482 (45.4%)
	DK/NA	2 (0.2%)	3 (0.3%)	37 (3.5%)	36 (3.4%)	78 (7.3%)
	合計	101 (9.5%)	169 (15.9%)	712 (67.0%)	80 (7.5%)	1,062 (100.0%)

上海		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	81 (7.7%)	18 (1.7%)	60 (5.7%)	7 (0.7%)	166 (15.8%)
	教師 教育者	21 (2.0%)	116 (11.0%)	133 (12.6%)	27 (2.6%)	297 (28.2%)
	その他	31 (2.9%)	23 (2.2%)	403 (38.3%)	26 (2.5%)	483 (45.9%)
	DK/NA	2 (0.2%)	1 (0.1%)	52 (4.9%)	52 (4.9%)	107 (10.2%)
	合計	135 (12.8%)	158 (15.0%)	648 (61.5%)	112 (10.6%)	1,053 (100.0%)

香港		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	43 (4.1%)	23 (2.2%)	159 (15.0%)	61 (5.8%)	286 (27.1%)
	教師 教育者	2 (0.2%)	35 (3.3%)	53 (5.0%)	19 (1.8%)	109 (10.3%)
	その他	18 (1.7%)	23 (2.2%)	290 (27.4%)	89 (8.4%)	420 (39.7%)
	DK/NA	4 (0.4%)	9 (0.9%)	91 (8.6%)	138 (13.1%)	242 (22.9%)
	合計	67 (6.3%)	90 (8.5%)	593 (56.1%)	307 (29.0%)	1,057 (100.0%)

昆明		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	54 (5.3%)	11 (1.1%)	50 (4.9%)	13 (1.3%)	128 (12.6%)
	教師 教育者	27 (2.7%)	104 (10.2%)	132 (13.0%)	36 (3.5%)	299 (29.4%)
	その他	21 (2.1%)	22 (2.2%)	284 (27.9%)	37 (3.6%)	364 (35.8%)
	DK/NA	7 (0.7%)	8 (0.8%)	83 (8.2%)	129 (12.7%)	227 (22.3%)
	合計	109 (10.7%)	145 (14.2%)	549 (53.9%)	215 (21.1%)	1,018 (100.0%)

杭州		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	30 (3.3%)	7 (0.8%)	33 (3.6%)	12 (1.3%)	82 (9.0%)
	教師 教育者	7 (0.8%)	66 (7.2%)	78 (8.6%)	31 (3.4%)	182 (20.0%)
	その他	8 (0.9%)	12 (1.3%)	205 (22.5%)	64 (7.0%)	289 (31.7%)
	DK/NA	2 (0.2%)	7 (0.8%)	100 (11.0%)	249 (27.3%)	358 (39.3%)
	合計	47 (5.2%)	92 (10.1%)	416 (45.7%)	356 (39.1%)	911 (100.0%)

台湾		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	10 (1.4%)	7 (1.0%)	26 (3.6%)	9 (1.2%)	52 (7.1%)
	教師 教育者	— (—)	33 (4.5%)	36 (4.9%)	11 (1.5%)	80 (10.9%)
	その他	8 (1.1%)	26 (3.6%)	255 (34.8%)	55 (7.5%)	344 (47.0%)
	DK/NA	4 (0.5%)	12 (1.6%)	102 (13.9%)	138 (18.9%)	256 (35.0%)
	合計	22 (3.0%)	78 (10.7%)	419 (57.2%)	213 (29.1%)	732 (100.0%)

韓国		つきたいと思う職業				
		医	教	他	DK/NA	合計
尊敬する職業	医者	18 (1.8%)	23 (2.3%)	48 (4.8%)	11 (1.1%)	100 (9.9%)
	教師 教育者	3 (0.3%)	78 (7.8%)	77 (7.7%)	12 (1.2%)	170 (16.9%)
	その他	10 (1.0%)	32 (3.2%)	359 (35.7%)	44 (4.4%)	445 (44.2%)
	DK/NA	4 (0.4%)	27 (2.7%)	133 (13.2%)	127 (12.6%)	291 (28.9%)
	合計	35 (3.5%)	160 (15.9%)	617 (61.3%)	194 (19.3%)	1,006 (100.0%)

の反対の「尊敬する職業」に「医者」と回答した人が、「つきたいと思う職業」でも「医者」と回答した場合は、該当率が大きく低下した。それに対して、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の「教師・教育者」への該当率は、「医者」とは逆の傾向を示している。この結果は、日本では「教師・教育者」よりも「医者」の方が尊敬される傾向が示されたが、実際に就業するとなると「教師・教育者」になるよりも「医者」になる方が遥かに難しい社会環境があるといえよう。

つぎに日本と同様に、中国5都市（北京、上海、香港、昆明、杭州）、台湾、韓国における「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」のクロス表（表5）の該当率を比較したい。

北京は、両方の質問への具体的回答をした人が88.5%、「なし・わからない」と回答した人が3.4%であった。以下同様に両方の質問への回答傾向について、上海は、具体的回答84.1%、「なし・わからない」4.9%。香港は、具体的回答61.1%、「なし・わからない」13.1%。昆明は、具体的回答69.3%、「なし・わからない」12.7%。杭州では、具体的回答49.0%、「なし・わからない」27.3%。台湾は、具体的回答54.8%、「なし・わからない」18.9%。韓国は、具体的回答64.4%、「なし・わからない」12.6%であった。これらの結果から、両方の質問に対して具体的回答をした人は、北京と上海で極めて高い該当率を示したことが確認できる。それとは反対に、日本以外で両方の質問への具体的回答が低い該当率であったのは杭州である。ただし、杭州の該当率を見ると、日本よりも具体的回答の該当率は明らかに高く、日本と杭州との具体的回答の該当率の差では14.9%、「なし・わからない」の該当率の差では9.4%になる。

日本以外の各国・地域のクロス表を、もう少し詳細に見てみたい。

北京は、両方の質問に具体的回答をする人が圧倒的に多いことを踏まえたうえで、他の回答傾向を見ると、クロス表のその他の該当率は、軒並み回答者全体の5%を下回る結果となっている。上海も北京と同様に、両方の質問に具体的回答をする人が極めて多く、クロス表のその他の該当率を見ると、北京よりは若干高いが、それでもすべて6%を下回る結果である。北京と上海は、両方の質問に「なし・わからない」と回答した人が、クロス表の組み合わせで最低の該当率となり、北京3.4%、上海4.9%を示した。

香港は、「尊敬する職業」で具体的回答、「つきたい

と思う職業」で「なし・わからない」と回答した人は回答者全体の16.0%、「尊敬する職業」で「なし・わからない」、「つきたいと思う職業」で具体的回答をした人は回答者全体の9.8%であり、「つきたいと思う職業」に比べて「尊敬する職業」の方が具体的回答をより多く得られた。この結果から、香港では、「つきたいと思う職業」よりも「尊敬する職業」の方が、具体的回答をあげやすいことが考えられる。

昆明は、北京や上海に続いて両方の質問に具体的回答をする人が、69.3%を示した。また、「尊敬する職業」で「なし・わからない」と回答し、「つきたいと思う職業」で具体的回答をした人は8.4%、その逆の組み合わせが9.6%となり、この違いは決して大きくはない。

杭州は、日本に次いで両方の質問に「なし・わからない」という回答が多かったことは前述したが、「尊敬する職業」で具体的回答をした人が、「つきたいと思う職業」で「なし・わからない」を回答した組み合わせは回答者全体の11.7%、その逆の組み合わせは回答者全体の12.0%となっており、二つの組み合わせの該当率に差があるとはいえない。

台湾において、「尊敬する職業」で具体的回答した人が、「つきたいと思う職業」では「なし・わからない」に回答した組み合わせは回答者全体の10.2%、その逆の「尊敬する職業」が「なし・わからない」、「つきたいと思う職業」が具体的回答の組み合わせは16.1%であり、後者の組み合わせが若干高い該当率を示した。そのため、台湾では「尊敬する職業」よりも「つきたいと思う職業」の方が、具体的回答をしやすことが考えられる。この回答傾向は、該当率は異なるが、日本の回答傾向と類似した特徴を示している。

韓国では、「尊敬する職業」で具体的回答、「つきたいと思う職業」で「なし・わからない」の回答の組み合わせは、回答者全体の6.7%である。その逆の「尊敬する職業」で「なし・わからない」、「つきたいと思う職業」で具体的回答の組み合わせは、回答者全体の16.3%である。この二つの該当率の差は9.6%であり、本研究の8つの国・地域のなかで最も差が大きい。このデータの特徴は、「尊敬する職業」で「なし・わからない」と回答しながら、「つきたいと思う職業」では具体的回答をした人が多い傾向として現れている。両方の質問への回答傾向が、圧倒的に具体的回答に偏っていた北京と上海では同様の傾向がみられていたが、この場合は「なし・わからない」が、両方の質問において極端に低い該当率を示していた。韓国の場合は、「尊

敬する職業」で「なし・わからない」、「つきたいと思う職業」で具体的回答という組み合わせは、回答者全体の16.3%であるので、極端に低い該当率であるとはいえない。それにも関わらず、このような結果が得られたことは、「尊敬する職業」は具体的に答え難いけれども、「つきたいと思う職業」は具体的にあげられるという意識が比較的多くの韓国人に形成されていることが考えられる。

クロス表の回答傾向を総合的に見ると、日本以外の国では、明らかに具体的回答の該当率が「なし・わからない」の該当率を上回る結果であった。積極的に具体的回答をするという集団意識は、日本と比較して中国、台湾、韓国においてより強く形成されていると考えられ、特に中国の北京と上海において具体的回答を得られた結果が鮮明に示された。これとは反対に、日本の具体的回答が低い該当率を示した要因については、今後十分な検証が必要であるが、先行研究で指摘されている日本人の中間回答を好む傾向や、あいまいな表現を好む傾向が、問39aや問39bの具体的回答を避ける傾向にも現れていることが考えられる。

また、「尊敬する職業」で具体的回答をした人が、「つきたいと思う職業」でも具体的回答をする傾向、その反対に「尊敬する職業」で「なし・わからない」と回答した人が、「つきたいと思う職業」でも「なし・わからない」と回答することが多い傾向は、日本の特徴に見られたが、香港、昆明、杭州、台湾においても同様の傾向が現れている。

5. まとめに代えて

一見同じ職業のように思えながらも、各国でそれぞれの職業の社会的（主観的）位置づけやイメージが異なることも少なくない。初期のSSM調査の分析では、特定の職業分類基準（ILOの標準職業分類）をあらゆる国に当てはめて、同一の基準で職業分類を行い、国際比較するという強引な分析方法もあった（Nisihira, 1958）。このような職業階層の国際比較は、社会環境や職業イメージが比較的類似する国の間においてのみ妥当ではあろうが、文化や社会状況の大きく異なる国々に当てはめるには、多くの課題がある。

1955年、1964年のSSM調査の結果から、西平（1964）が、「他の調査と比較するときに、どんな職業を組み合わせるかによって、スコアがかわってくるということについての警告ともいえる。」と指摘しているよ

うに、調査者が職業名を明示する場合、職業名のセットの組合せによる得点への影響（効果）が現れる可能性を含んでいる。このような影響も考慮にいれながら本研究における日本調査の質問別の結果と対照してみると、SSM調査において「大学教授（大学の先生）」は、「医師（医者）」の順位よりも上位であるが、「東アジア価値観調査」に基づく本研究で「教師」に括った初等教育の先生に当たる「小学校の教諭（小学校の先生）」が「医師（医者）」よりも下位である関係は、「尊敬する職業」の順位と類似している。本調査研究の「尊敬する職業」で第3位であった「農業」に対応する「自作農」、「小作農」は、SSM調査の職業ランキングでは、半分より下位に位置づけられており、「小作農」については下位10位以内に入る結果であった。単純に本調査の自由回答の結果と、SSM調査の職業ランキングとを比較することはできないが、データ収集の方法が異なれば、結果も異なることを示唆している。

SSM調査などの先行研究を踏まえたうえで、今回新たに「東アジア価値観調査」で「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の質問を加えたのは、単にこれらの質問への回答について個別に分析することだけが意図されたわけではない。SSM調査のように、明示された職業名について段階が設定された分類課題を行い、得点を与える方法は、調査主体が職業名を明示しない自由回答の方法に比べて一見比較可能性を容易にするかに思える。しかし、この方法による尺度構成に課された回答者の回答プロセスにおいて想定される制約は厳しく、現実的ではなく、職業を単純な一次元の物差で評価することにも問題が残る。自由回答は、そのような制約を想定せず、回答の多様性により集計や比較の難しさは生まれるが、回答者の意見をより直接的に回答に反映できるという利点がある。そして、先入観を持つことなく、調査対象の職業観についてデータを収集したい場合に、回答者自身の言葉で回答を得ることが最初の段階では必要である。この段階の方法は、調査主体が回答者に厳しい制約条件を与えるトップダウン型の調査項目よりも、回答者自身の言葉を調査から収集し、データに基づいて回答を整理するボトムアップ型の自由回答の調査項目が適している。

尺度水準（Stevens, 1946）の視点からデータの性質について考察すると、SSM調査の評価の5段階に与えている得点の考え方は、データを間隔尺度水準で扱っていることを意味している。それに対して、自由回答形式はデータを名義尺度水準で扱うことになる。この

後の段階で、両調査とも職業ランキングを示しているが、尺度水準が異なる二つの順位は、同一の意味を持ち得ない。では、評価の5段階に得点を与える扱い方が、本当に間隔尺度を保証するといえるであろうか。このようなデータは、本当は個人差も、心理量の曖昧さの幅も含んでいる。そこで、SSM 調査の結果をどう見るかという点、少なくとも同一の手続きの得点と順位について比較した場合は意味を持つといえよう。このような理由から、SSM 調査に代表される先行研究との比較は、現時点では十分に行えてはいない。大きく異なるデータ収集の方法を用いた複数の結果を、解釈の段階でのみ比較することに躊躇いがあるからである。慎重すぎる態度であるかもしれないが、調査計画の段階から他の調査方法との比較を念頭に入れていない場合、最終的な結果の相違を生じさせている可能性を多様に拡大してしまうように思える。例えば、要因の特定ができないことによって、データ収集の方法に内包される制約条件によるデータへの影響による差異と、集团的意識や最頻の意識の本来の差異とが判別しにくくなるという問題点を指摘できよう。調査計画の段階から比較を念頭に置くということは、最終的に結果の相違を断定するときに要因の特定や限定をするためである。

また、調査における回答者の回答は、意識や尺度のどの位置やどの水準で扱われると考えるのであろうか。本論文では、回答者自身の言葉による表象という水準で、比較可能性を検討している。ここでの表象の取り扱い、本音か建前かを問題とする段階ではなく、その前段階にあり、回答者が使った言葉をそのまま記述し、その記述を出来るだけ加工せずにまとめることである。そのまとめたものを示したのが、今回の結果である。これらの示された言葉がもつイメージや意味の解明は、今後の課題に位置づけられるであろう。

今回、東アジアにおける人々の価値観一般を比較する多数の項目の中での限られた項目数で、職業の国際比較の可能性を検討しなければならないという制限の下で、自由回答形式を選択した。その調査結果から、「尊敬する職業」と「つきたいと思う職業」の両方の質問において、「教師」、「医者」、「なし・わからない」が各国で共通してある程度高い該当率を示したことから、日本、中国、台湾、韓国における国際比較の可能性として、まずこれらの回答傾向を分析すべきことが理解できた。今回示された「教師」、「医者」、「なし・わからない」というカテゴリーを見るため、同様のボトム

アップ型の調査項目を継続調査するののもひとつの考え方であるが、「教師」をSSM 調査の「大学教員」、「高等学校教員」、「中学校教員」、「小学校教員」、「幼稚園教員」のようにトップダウン型の調査項目に反映させて国際比較に用いることも考えられる。ボトムアップ型の結果があるから、トップダウン型へ取り込んだ際に、SSM 調査のように膨大な職業についてひとつずつ評定してもらう必要がなくなる。これによって、職業観だけではなく他の質問項目も多く取り入れたい調査では、国際比較のモノサシとなる質問項目を調査票のなかで効果的に用いることができる。

また、自由回答のため、回答の多様性が大きく、その他の職業カテゴリーについて詳細な国際比較が可能といえるほど共通の職業はあがってこなかった。ただし、特定の国に限定して職業観を調査する場合は、低い該当率の職業の結果も参考にはなると思われる。今後の研究の方向は、極めて低い該当率に基づいて国際比較の可能性を探索するよりは、ある程度高い該当率を得られたカテゴリーと他の質問項目との関連性において国際比較の可能性を探索する方向へと発展させていきたい。

謝 辞

本論文の原稿に対して、首都大学東京の中尾啓子先生（社会学）から貴重なコメントとアドバイスをいただきました。深く感謝いたします。

参 考 文 献

- Breiger, R.L. (1981). The Social Class Structure of Occupational Mobility. *American Journal of Sociology*, 87(3), 578-611.
- Duncan, O.D. (1979). How Destination Depends on Origin in the Occupational Mobility Table. *American Journal of Sociology*, 84(4), 793-803.
- Ganzeboom, H.B.G., Treiman, D.J. & Ultee, W.C. (1991). Comparative Intergenerational Stratification Research: Three Generations and Beyond. *Annual Review of Sociology*, 17, 277-302.
- Ganzeboom, H.B.G. & Treiman, D.J. (1996). Internationally Comparable Measures of Occupational Status for the 1988 International Standard Classification of Occupations. *Social Science Research*, 25, 201-239.
- Hauser, R.M. & Mossel, P.A. (1985). Fraternal

- Resemblance in Educational Attainment and Occupational Status. *American Journal of Sociology*, **91** (3), 650-673.
- 林知己夫 (2000). これからの国民性研究—人間研究の立場と地域研究・国際比較研究から計量的文明論の構築へ—. 統計数理, **48** (1), 33-66.
- 林知己夫 (2001). データの科学. 朝倉書店.
- 林知己夫編 (2002). 社会調査ハンドブック. 朝倉書店.
- 林知己夫, 鈴木達三, 吉野諒三, 三宅一郎, 佐々木正道, 村上征勝, 林 文, 釜野さおり (1998). 国民性7か国比較. 出光書店.
- Hout, M. (1984). Status, Autonomy, and Training in Occupational Mobility. *American Journal of Sociology*, **89** (6), 1379-1409.
- Hout, M. (1988). More Universalism, Less Structural Mobility: The American Occupational Structure in the 1980s. *American Journal of Sociology*, **93** (6), 1358-1400.
- Jencks, C., Perman, L. & Rainwater, L. (1988). What Is a Good Job? A New Measure of Labor-Market Success. *American Journal of Sociology*, **93** (6), 1322-1357.
- 貝原益軒 (1938). 大和俗訓. 岩波文庫. 岩波書店.
- 三好美浩・吉野諒三 (2003). 自由回答に見る職業意識の分析. 日本行動計量学会第31回大会発表論文抄録集, 252-253.
- 三好美浩 (2004). 「職人かたぎ」—日本人の仕事(勤労)観. 学際, **12**, 46-53.
- Nakao, K. & Treas, J. (1994). Updating Occupational Prestige and Socioeconomic Scores: How the New Measures Measure Up. *Sociological Methodology*, **24**, 1-72.
- 直井 優・鈴木達三 (1977). 職業の社会的評価の分析—職業威信スコアの検討. 現代社会学, **4**(2), 115-156.
- 直井 優・盛山和夫編 (1990). 現代社会の階層構造① 社会階層の構造と過程. 東京大学出版会.
- NHK放送世論調査所編 (1979). 日本人の職業観. 日本放送出版協会.
- 日本社会学会調査委員会(1956). わが国における社会的移動. 社会学評論, **25**, 2-60.
- Nisihira, S. (1958). Cross-National Comparative Study on Social Stratification and Social Mobility. *Annals of the Institute of Statistical Mathematics*, **8** (3), 181-191.
- 西平重喜(1964). 成年の常識および職業の社会的評価. 統計数理研究所研究リポート12, 統計数理研究所.
- Perrin, E. (1904). On the Contingency between Occupation in the Case of Fathers and Sons. *Biometrika*, **3**, 467-469.
- Reischauer, E.O. (1981). *JAPAN: The Story of a Nation*.
- 國弘正雄訳 (2001). ライシャワーの日本史. 講談社学術文庫, 講談社.
- 柴田実校注 (1971). 石門心学. 日本思想体系 42, 岩波書店.
- 園田茂人編著 (2005). 東アジアの階層比較. 中央大学社会科学研究所研究叢書 15, 中央大学出版.
- Stevens, S.S. (1946). On the theory of scales of measurement. *Science*, **103**, 677-680.
- 鈴木寸鉄編 (1962). 鈴木正三道人全集. 山喜房仏書林.
- 鄭 躍軍編 (2005). 日本・中国の国民性比較のための基礎研究—中国杭州市と昆明市における意識調査—. 総合地球環境学研究所研究リポート 01, 総合地球環境学研究所.
- Yamaguchi, K. (1983). The Structure of Inter-generational Occupational Mobility: Generality and Specificity in Resources, Channels, and Barriers. *American Journal of Sociology*, **88** (4), 718-745.
- 吉野諒三 (2001). 心を測る—個と集団の意識の科学—. 朝倉書店.
- 吉野諒三 (2004). 「国民性」の調査—計量的文明論の確立に向けて—. 学際, **12**, 6-12.
- 吉野諒三編 (2004a). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2002年日本調査報告書. 統計数理研究所研究リポート 91, 統計数理研究所.
- 吉野諒三編 (2004b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2002年度中国[北京・上海・香港]調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三編 (2005a). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2003年韓国調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三編 (2005b). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2003年台湾調査報告書. 統計数理研究所.
- 吉野諒三編 (2005c). 東アジア価値観国際比較調査—「信頼感」の統計科学的解析—2004年シンガポール調査報告書. 統計数理研究所.
- Weber, M. (1920). *Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*.
- 大塚久雄訳 (1989). プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (改訳版). 岩波文庫, 岩波書店.

(2005年6月9日受付, 2005年8月5日最終修正)